「ああい

楠 山正雄

せっ と、 んどん石ころや土くれをおじいさん 裏の山から りました。 く丹精を-たんせい してこしらえた畑のものを荒ら おじ 一ぴきの古だぬきが出てきて、 あるところに、 いさんが も畑に のうしろから投げ 出て働い さんとおば おじ た上に いさん あさん ます

来^きて、 上^ぁが その おじいさんも困りきっ ある日、 わなをかけておきますと、 いたずらをしました。 ばら お わな じいさん つ て喜び あい くするとまたや い気味だ。 たぬきはとうとう しまいます。 か かわらず は 躍^おど ま りま l) て、

て行

て

した。

おじいさんがおこって追っ

かけますと、

すばや

逃げ

けま



とうとうつ う言っ かまえてや たぬきの った。 四つ足をしば つ て、 うち か、

帰_えり 「逃がさないように番をし ま そ して天井のてんじょう て は りにぶら下 晩ぱん に わ た -げて、 が帰るまでにたぬ おばあさんに、 いで

き汁をこしらえてお いてお

と言い のこして、 また畑な 出

て

きま

は臼を出れ き して、 か ばられてぶら下 とんとん麦を ^{むぎ} げ つ 5 て れ まし る下で そ のう お ば さ

たび れた。

とおばあさんは言っ おとな くぶら下が て 汗をふ て いたたぬきが、 きました。 するとその 上から声をか とき

けま

「どう しま $\bar{\mathfrak{t}}$ ŧ う。 てどう その おばあさん、 代わりこの お前な んぞに手伝 縄をと たび れたら少し て下 ってもらえる さい。 お手伝だ を

縄 を と てや つ たら、 手伝うどころか、 すぐ逃げて行っ て

い いえ、 もうこう かまっ たのですもの、 今は さら 逃にげ

まう

だろう。

あ んま のです IJ か。 まあ、 っこく、 ため 殊勝らしゅしょう ż たのむものですから、 てごら んなさ お

ば 縄をといて下ろしてやりました。 あ さ ŧ う か、 うか、 た ぬきの言うことをほ するとたぬきは、 んとうにし

「や れ しばられた手足をさすりまし や れ。 そ

5

わ た しがついてあげましょ

ふりをして、 と言い なが 5 (, きなり おばあさん おば あ のきねを取ったと さん 0) 脳天のうてん か <u>上</u>ぁ らきねを打ち下 一げて、 麦^むぎ

しますと、 倒れて死んでしま 「きや つ。 と いう間も ま した。 おばあさんは目をま

す わ É た ぬ た顔をして炉 ば きはさっそくおばあさんをお料理 ばあ汁をこ の前に座れる しらえて つ て、 自分ん おじいさんの帰りを待ち は おばあさんに て、 たぬ きける け 代か

け

ま

夕方になゆうがた つ な にも 知ら な お さ

は

晩んば たぬき汁が 食た べられるな。

と ま も て、 一人でとり にこにこしながら、 急ゃ () うち 帰え つ 7

来き ま するとた ぬきのおばあさんはさも待ちか ね

をこしらえて待っ おや、 お さ て () ま お か

11

h

な

さ

(1

さっ

きか

5

た

ぬ

きける

0

うように、

と言いまし た。

ぬきのおばあさんのお給仕で おやおや、 と言いながら、 そうか。 す そ お 膳^{ぜん} は あ 前 に 座 すわ がた りました。 そし

た

夢中に 現ま は と言っ 思わず、 はお て て食べていました。 舌つづみをうっ 「ふふん。 お () と笑うひょうしにたぬきの正体をから て、ばばあ汁のおかわりをし それを見てたぬきのみ おばあさ

7

「ば ば あ た

しました。

流が の 0 骨ね を 見 ろ。

とたぬ きは言い な がら、 大きな ぽ を 出^だ 裏う

逃にげ きま た。

お いさんはび そ て流が IJ **の** おばあさん か つ か、 の骨を IJ 腰をぬ か、 か、 かえて ま お (1

お 泣な () て

す る

ああ、 と言っ じ ひ いさん、 て、これも裏 うさぎさんか。 目にあ お つ たよ。 さん、 山に ょ いる白うさぎが入 どう 来ておくれだ。 したのです。 ま あ聞^き つ て 来 ま ておく た。

り話を とおじ しました。 いさんは言っ うさぎは て、 これこれこうい いそう気の毒が う けだとす つ

がきっ とたのもしそうに言いました。 ととっ それはとんだことで て上げますから、 したね。 安心・ おじ けれど て いさんはうれ Ś かたきは し涙をこ わ た

しわたしにく

れな

ぼ

しながら、

ああ、 どうか頼みますよ。 ほ h た

てたまらない

「大丈夫。あしただいじょうぶと言いました。 とうさぎは言って、 してやり したはさっそく ます。 帰れ しばら て たぬ いきまし 待ま きを誘 て 5 11 出だ や ひ

さてたぬきは ものですから、 お じい さん どこへも出ずに穴にば のうちを逃げ 出だ か IJ 引ひつ 込こ 何なん だか

す

とある日、

うさぎは

かまを腰

わざとた

き

ばを 持も 0 ぬ きはそ て 来き 刈か た 0) て たかち栗を出-音を聞きつけて、 いま いる穴のそば そ へ 行^い 穴^ぁな しばを刈か ば つ て IJ ば 中 かまを出 からのそのそは IJ IJ 食べました。 ながら、 袋的 しきり す る 出だ

「乗り 「うさぎさん、 の実さ。 うさぎさん。 何をうまそうに食べて (1 る の

「上げるから、 この しばを半分向こうの山まで しょ つ て (, つ

| |

お

負ぉっ たぬきは栗が て 先 き 亡 立 た ほ つ て 歩き 出 ŧ 0) しました。 すから、 向むこう か たな の 山まで に ば 行 を 背 せ

と、 たぬ きはふ IJ 返れ つって、

「うさぎさん、 うさぎさん。 かち栗をくれ な

かたがな 上げるよ、 ので もう またたぬきはず ーつ 向こう の んずん先に 山まで つ 立た た つ 歩る

7

きま した。 や がてもう つ 向こう の 山まで行 と、 た め

きはふ りがえっ て、

「うさぎさん、 うさぎさん かち栗をく れ な (1

てお あ あ、 上げるけれど、 こんどはきっ つ と上げる。 (\ で にもう から。 つ 向こう の 山まで行

も 早 ^{はや} か たが 、向こう な (, ので、 0 山まで たぬきはまた先に立た 行きつこうと思 つ て、 つ て う しろもふ は 何ん

ふ、 向む かずに ところ から せ つ せと歩 火打ち石を出 て いきま した。 かちかち。 うさぎはその と火をきりま ひまに

たぬきは んに思 つ て

「この 「うさぎさん、 山は かちかち山だからさ。 う さぎさん かち か、 ちいうの は何だろう。

ああ、 そう か。

と言って、 たぬきはまた歩き出 しました。 そのうちにうさ

た。

燃もえ ぎの 出 け しま た火が、 した。 たぬきの背中 た ぬきはまた の h に 思 ま も ばにう つ つっ て、 ぼうぼう

13

「うさぎさん、 うさぎさん、 ぼうぼう (, う **の** は 何だろう。

向こうの 山はぼうぼう 山だからさ。

ああ、 そう か。

たぬきが言う う ちに もう はず h ず ん 背 中 燃え ひろ

かヾ つ て ŧ いま た ぬ きは

「あ つ () あ つ (1 助なす け て れ

は らどっ とさけ ひ と吹き ひ び な 泣き声を上げなでえる かヾ 5 け 夢中される ょ け か け 苦^くる 火が大きくなりました。 出だ がっ しますと ころげま 山風がまかぜ かべ う たぬき つ ろ

みま や つ あ と のことで燃える うさぎは ん。 火事だ。 わざ じばをふ と大きな 火事だ。 IJ 落お 声 穴^ぁな 中 か、 け 込こ

と言いながら帰いかながる つ いきました。

見^み舞^ま う てこう そ **の** あ 15 んうなりながら、 やっ くる日、 くをこしらえて、 て来き うさぎはおみその中に唐がら した。 まっくらな穴の中にころがっ それを持む たぬきは背中中大やけどをして つ てたぬき しをすり ところ て いま 込こ

あ 「たぬきさん、 つ たねえ。 たぬきさん。 ほ んとうにきのうは ひどい目に

15

「ああ、 ほ んとう に ひ ピ () 目にあ たよ \sum_{i} の 大_おや け は

うしたらなおるだろう。」

「そう ちば か、 ん 利き そ れ で そ くこうや ね、 れ はあ あ くをこしらえて持も んまり IJ がたい 気き の 毒 ど だ さっそく か ら、 って来た め た のだよ。 てもら かべ け

る背中を出 かまわずこてこてぬ (1 つ しますと、 て た ぬ きが IJ 火ぶ うさぎはそ つけました。 れ 15 、の上に唐が、 な つ すると背中は て 赤かか 5 肌だだ た みそをとこ はまた火が

う。

ついたようにあつくなっ

「いたい、いたい。」

うさぎはそ と言いな の かヾ ら、 様子を見て ぬきは穴の中をころげま にこにこしながら、 わ つ て した。

よ。 なあにた な ぬ お きさん、 る から、 ぴ 少さ りぴ りする 間がま **の** んお は は じ め の ちだけだ

と言って帰っていきました。

四

「たぬきのやつどうしたろう。 か、 Ġ 四 五 日ち たちま こんどはひとつ海に連れ ある日うさぎは . 出だ

と言いました。

たぬきは

どい目 にあ わ せてやろう。

独と り言を言 つ いるところ ひ ょ つ IJ たぬきが たず

ねて来ました。

おやおや た ぬ きさん もう や け は なお つ か、

「ああ、お陰でたいぶよくなったよ。

それは () や あまたどこか 出 か

「いやもう、山はこりごりだ。」

「それなら山はよして、 こんどは海 行こう (1 か、 海ず

はおさかながとれるよ。」

「なるほど、海はおもしろそうだね。

そこでうさぎとたぬきは連れだ つ て 海^うみ 出 か、 けま う

さぎが さぎは まねを 木 木 つに舟をこ · の かね **の** 舟をこ 土の舟をこしらえました。 に乗りま しらえますと、 沖き た。 出ますと、 たぬきは土の舟に乗りました。 たぬ きはうらやま 舟がれ でき上がると、 かヾ つ て う

「いいお天気だねえ。」

「いいけしきだねえ。」

んでんに言 (\ な がら、 めずら しそうに海をなが め て ()

ましたが、うさぎは、

で行こう。 ここらにはまだおさかな さあ、 ピ っち が 早^はや は か競争しよう。 も 沖き の 方までこ

18

よし、 そ れはおもしろかろう。

と言いました。

そこでー、 三とか け 声を こぎ出だ うさ

ぎはかん か、 ん舟ばたをた た

「どうだ、 木 舟は 軽る つ て 速や か、 ろ う

と言いま した。 す る と たぬきも負け 気にな 舟なな

たをこ

なあに 土っ 一の舟はいる。 重まも つ て丈夫だ。

と言いま た

そのうちに だ h 水が みて 土っ の 舟ね は 崩 ず 出だ

あ、 (\ h 舟がこわ れてきた。

た ぬ き かヾ び IJ 大され わ ぎをは めま

沈ずむ 沈ずむ 助なす け て

うさぎは たぬきの あ わてる様子をおも しろそう な かい め

「ざまを見ろ。 お ば あさん をだま て 殺る おじ さ

ばばあ汁 を食 わ せ た むく だ。

舟ね くれと言っ は崩れて、 と言いますと、 て ぷあ う た ぬきはもうそ さぎをおが みま h なこと は そ の うちど な (\ か 5 助なす け

h しまいまし た。

あ

つ

つ

, , , ,

いうまもなく、

たぬきはとうとう

20

底本:「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

| 1983 (昭和 58) 年 5 月 | 0 日第 | 刷発行

1992 (平成 4) 年 4 月 20 日第 14 刷発行

入力:鈴木厚司

校正:大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (http://www.aozora.gr. jp/) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

楠

山正雄

さく

むかし、

あるとこ

ろに おじいさんとおばあさ

か あ りました。 おじ さん

かヾ も畑に出て働い て ま

すと 裏^うの Ш から ぴきの

だぬきが出てきて、

ますと、 ろ お や土くれをおじいさんのう さ から投げつけました。 てこしらえた畑のはたけ しまいます。 した上に、 いさんがせっ がおこって追 すばや どんどん石ころ く逃げて行 しばらくする 0 か ものを荒 、丹精を か、 お け つ

をかけ らず か たぬきはとうとうそのわなに とまたやっ か、 さんも困りきって、 りました。 いたずらをしま ておきますと、ある日、 て来きて、 した。 あ () わな か、 お

喜^{ょろこ} ま 「ああ かまえて おじ こう言って、 (, くさんは躍れ い気味だ。 や つ た。 1) かヾ 四ょ



たぬきの

足をし で 帰かれ はり しばっ に ぶら下げて、 ま した。 て、 うちへか そして天井の おばあさ

お て、 たぬき汁をこしらえてお んに 「 逃 が れ。 晩にわたしが帰るまでばん さ な (\ よう に 番ん を 7

出て と言いの いきま た て、 また畑へ

声を

か

け

ま

した。

たぬきがし ばられてぶら下

> を は つ 臼を出だ て いました。 とんと そ 0)

ち、

あ とおばあさんは言って、 あ た び れた。 するとその 7

きま をふきました。 て て、 たたぬきが おとな ぶら 上から

ŧ し も おばあさん、

たび たし の縄をといて下さい ましょう。 れたら少し お手伝だ その 代か わ をい IJ

伝_だう んぞに手伝ってもらえるも 「どう・ 縄をとい してどうして、 てやっ すぐ逃げ たら、 お 前 ぇ 手

げるものですか。 ま \neg た いえ、 の て すもの、 もうこう まあ、 今さら逃りしてつか ため

行い

て

しまうだろう。

どころか、

5 勝し たぬ は や 15 らう あ きの言うことをほん 下ろしてごらんなさい おばあさんもうかうか まり した。 縄をといっ た の するとた む もの て 下ぉ つ こく、 で 3 す め とう き

ました。 やれや と しばられた手足をさすり れ。 そして

さ

おばあ

げられ

てい

る下で、

たしが つ てあげ

代かん

をお料理して、

たぬき汁

よう。

目を 下ろ あさ いう)きねを取り-と言いなが、 間もなれ まわ りを・ んの脳天からきねを打ち しますと、 して、 て、 5 上げて 倒お 「きやつ。 いきな おばあさん れて死し おばあさん りおば 麦^{むぎ}を は 7

たぬきはさっそく おばあさ

まいま

した。

タ方になって ^{ゆうがた} を待ちうけて らな に 座_か て、 な 「 晩 は 自分はおばあさんに化けわりにばばあ汁をこしらえ つ すまし て、 お たぬき汁が食べた じ た顔をして炉 お さん 7 じ いました。 は さん な h の 帰っかの 1 前っまけ 15 ŧ 1 る 知し

と 思っ 一人でにこに

て来き. おばあさんはさも待ち な がら、 した。 急ゃ する いでうちへ帰れるかえ とた ぬ か き つ

「おや、 おじい さん、 お か、

というように、

汁をこ んなさ () らえて待 さっ き か つ ß て いま た ぬ

たよ。 と言いま-た。

お やおや、 そう か。 そ れ は

あり がたいな。」

> て た 0 前に座りました。 と言い ぬ きのおばあさんのお給仕 ながら、 す そ お 膳

は お お 1,

(1

と言っ 夢中になって金ばばあ汁のおか て、 舌た て 食^た つづ か みをう わ て IJ (1 を ま

ばあさんは、 した。 それを見てたぬきの 思わず、 お

の

きの h)正体を現しい あらわ と対う しま ようしにた した ぬ

きな 流が たぬきは言 (, 「ばばあく つぽを出. と逃げて の下の骨を見ろ。 ったじ いきまし いながら、 裏口か じ た。

らつ

た。

ま おばあさんの骨をか お ŧ かヾ した。 か さん り腰をぬ そ は して なが 流がか び つ かえ

すると

て、おいお

(\

泣な

どう おじいさん、 したのです。 お じ さん、

(1 る白うさぎが入って来ま と言っ て これも裏 0

来ておくれだ。 ああ、 とおじいさんは言っ ひど うさぎさん い目にあ ま あ 聞 き か、 つ たよ て、 () 7 ょ

けだとす つ 7 うさぎは つ ほん と言 とう いまし たまらな に した。 わた (1 は や

か

り話をしました。

いそう気の毒が

「まあ、

それはとんだことで

ったね。

け

れど

かたきは

わた

がきっ

ととっ

て上げます

れこれ

う

うわ

目に たぬきを誘 いきました。 「大丈夫。 合あ う 待ま わ さぎは言っ つ て あしたはさっそく いら て (, 出だ や IJ つ ·ます。 て、 て、 や 帰^かえ つ ひど

「ああ、 どうか頼みますよ。 た。

おじ

いさんはうれ

とたの

ŧ

しそう

言

ま

こぼ

な

がら、

ら、

安心しん

て

5

つ

や

ていました。

うちを逃げ出してから、 も出ずに穴にば さてたぬきはおじい わ した。 も です から、 か、 IJ 引っ さん 何^なんだ と、こ

いま

きの 行い まを腰にさして、 するとある日、 か くれている穴のそばへいさして、わざとたぬ かまを出して うさぎは しきり か、

> する は しばを刈か けて、 て しばを刈り 出 て 持も とたぬきはその音を聞き ば してきました。 穴の中からのそのそ りばり食べ って来 つ たかち栗を出 いまし ました。

だね。 何をうまそうに食べているのなに うさぎさん、 うさぎさん

「栗の実さ。

背負っ 分向こうのぶんむ す しま う 「上げるから、 っておくれ。」 か たぬきは栗がほ 5 さぎさん、 て、 わたしにくれな たぬきはふり返っ 向こう 山まで この うさぎさん。 つ て歩き出 しばを半 山まで行 ŧ 7 ばを

かち栗をくれないか。」

でにもう

一つ向こうの山まで

向こうの ぬ たぬきはふ かち栗をくれな ああ、 ああ、 きはずんずん先に立って歩 うさぎさん、 7 向こう いきまし かたがな 上げるよ、 上ぁ 山まで行っ 一げるけ り返って、 0 た。 いので、 山まで行 () うさぎさん。 れど、 か。 や たら。 もう がてもう またた

行 と上げる つ てお こんどはきっ

何んなん き ま 向かずにせる たたさきに も早はや こうと思って、 、向こう 立た っせと歩 の て、 山まで うしろ こんど た ぬ は き

まに、 きました。 ふところから火打ち石 うさぎはそ ひ

を 出だ 「かちかち。

をきりました。 たぬきはへ

に 思 ま も つ て、

「うさぎさん、 うさぎさん

かちかちい は うのは何だろう。 かちかち 山だから

ぼう燃え出-だ き出しまし さぎ 「ああ、 と言って、 つけた火が、 ば そうか。 た。 にう しました。 たぬきはまた歩 そ つ つ のうちに たぬ たぬき ぼう き

はまたへ h に 思 ぉ も

ぼうぼうい う 「向こうの さぎさん、 う の はぼうぼう は うさぎさん、 傾だろう。

からさ。

「ああ、 そう か。

とたぬきが言うう

はず んず ん 背 中 燃^もえ

ろが つ しま いました。 たぬ

きは

「あつ あ () 助^をけ

け るしばをふ からどっと吹きつけて、 きは 出だ 火が大きくなりました。 とさけび か、 て、 苦る しますと、 V 込みま かヾ り落として な つ ソ落として、穴のとのことで燃え *泣き声を上 山風がう ころげ うさぎ

わざと大きな声で、

や た () 火事だ。

た。

たぬきは背中中大や

火事だ。

た。 と言いながら帰かれ つ て

みその んでこう のあ 中 くる や 唐がらしをすり くをこしらえて 日、 うさぎは

込

それを持っ お 見 舞 ま つ てたぬきのところ にや つ て来まし

> ら、 をし つ て、 まっくらな穴のあなめな て いました。 う んう んう 中 な IJ にころ なが

かべ

ほ h たぬきさん、 とうにきのうは た ぬ きさ ひど (, 目

あ たねえ。

お

どう あ ああ、 したらなおるだろう。 たよ。 ほ んとうに この大や ひ け ピ は 目

うん、 それでね、 あんまり

気き の毒だから、 いちば らえて持っ ん利くこうやく わたしが て来たの や だ け

た

火

か

たよう

ところかまわずこてこて

め

l)

けました。

すると背中は

は

ま

(, 「そう な。 か、 さっそくぬ (\ それは つ あ てもらお IJ か た

う。 ぎはその上に唐がらしみそを 1 1, る背中を出れ つ て 赤 肌 に た します ぬきが ただれ と、 火 うさ " ``` 7

> た。 な と言い つ こにこしながら、 いた 中をころげまわ て、 うさぎはそ (\ な がら、 (, た **(7)** () 様子 たぬ つ 7 を 見^み き は ŧ

1)

するの

は

はじめのうちだけ

なあ

た

ぬきさん、

ぴ

け

ピ

だよ。 きになおるから、 少さ

間が まんお て 帰ぇ つ

と言っ て いきまし

た。

匹

れから四、 五日た ちま

た。 ある日うさぎは

な

たよ。

う。 出だ たぬきのやつどう こんどはひとつ海に連 ひどい目にあわせ

> ず ろ やろう と独と ねて来ました。 り言を言っ ひ ょ こり て (, る

うやけどはなおったか あ おやおや、 あ、 お 陰_げ で たぬきさ た たぬきがた (, " 'Čv (1 ょ

それ は () な。 じ や あ ま た

か もう、 出 か けよう Ш はこり か。

が ると、 ま らえまし した。 うさぎは木の舟に たぬきは土った た。 舟が に舟を 舟 き 上ぁ 乗の

ど は 海み

行こうじゃ

な

か、

「それ

なら

山はよし

海はおさかながとれるよ。

だ。

´ました。 で 沖^おき へ出ますと ベ つべ つ

お 天気だねえ。

うだね。」

「なるほど、

海はおも.

しきだねえ。 んに言 な か

めずら しそうに海をなが めて

ここらにはまだおさかなは うさぎは

かべ

まねをして土の舟をふね

す

た

ぬ

きはうらやま

うさぎが木

0

舟をこ

しらえま

れだって海

出か

け

ま

た

そこでうさぎとたぬ

きは連っ

16

が 早^はい 行こう。 もっと沖の さあ、 方まで どっ

速かろう。」

どうだ、

木

の舟は軽がるかる

・か競争し しよう。

と言いました。 たぬきは

よし、 それはおもし

ろかろう。

と言いました。

さぎはかんか こぎ出し、一、二、 ん舟ばたをたた しました。 三とか 、 け ご え

> 「なあに、土の舟は重くっぱたをこんこんたたいて、 きも負けない気になっ と言いました。 する とたぬ て、

丈夫だ。

と言いま-

みて生の そのうちにだんだん水が 舟 は 崩 れ ば だ だ しま

た。

「やあ、 たい h 舟がこわ

れてきた。」

だ。

とたぬきがび IJ

大さわぎをはじめましおお

「ああ、 沈ずむ、 沈ずむ、 助 け て

様子をおもしろそうにながょうす うさぎはたぬきの あ わ

ながら、

だまして殺 「ざまを見ろ。 お ばあさん おじいさん

にばばあ汁を食わせたむく

どん舟は崩れて ^{ふね}くず おがみました。 けてくれと言っ うそんなことは とう沈んでしまいました。 と言いますと、 うまもなく、 て、 て、 そのうちどん しないから助 たぬ あ た っぷあ ぬきはと うさぎを きは ŧ

て

底本:「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983 (昭和 58) 年 5 月 10 日第 1 刷発行

1992 (平成 4) 年 4 月 20 日第 1 4 刷発行

入力:鈴木厚司

校正:大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

じいさんも困

[りきっ

たずらをしました。

来て、

あいかわらず

ばら

くするとまたやっ

て働いていますと、ばあさんがありまし えた畑のものを荒らした上に、出てきて、おじいさんがせった む か、 裏うたの あるところに、 山から一 おじいさん か、 どんどん石ころやしたんせいかく丹精をしてこしたたんせい かヾ お いつも畑に出いてもといさんとお

わなをかけておきますと、 しまいます。 すばや て、

逃げて行って上追っかけますと

かけますと、

から投げ

つけま

した。

じいさんがおこって

れをお

じいさんのう

さい。」

「どうしてどうして、

ある日、たぬきはとうとうそのわなにかかりました。

て、 か、 「ああいいさんは躍りまじいさんは躍り 「ああ ついで帰りました。 おばあさんに、 した。そして天井のはりにぶら下げたぬきの四つ足をしばって、うちへだ。とうとうつかまえてやった。」 り上がって喜びました。

にたぬき汁をこしらえておいてお逃がさないように番をして、晩にばん たぬきがしばられてぶら下げられている下で、 と言いのこして、また畑のはたけい 出て いきました。 わた < れ。 が 帰_え るま

お

ばあさんは臼を出だすが とんとん麦をつ ^{むぎ}

た。 そのうち、

とおばあさんは言って、「ああくたびれた。」 汗をふきまし た。 すると

かべ そのときまで、おとな から声をかけま した。 しくぶら下がっていたた

いをい **5** しもし、 た しましょう。 おばあさん、 その代か くたびれたら少すこ りこの縄をといて といて下るだが

お前なんぞに手伝ってもらえ ぬき 「UD デジタル教科書体」サンプル(A4 判:30pt) なく、

お

ば

あ

さん

は目をまわして、

倒れて

まいま

た。

るも 5 さら逃げるものですか。「いいえ、もうこうして す んなさい。 逃に げ か。 て 行い 縄をといてやったら、 つ て しまうだろう。 してつ まあ、 かまっ た め た 手伝うどころか、 ので しに 下ろ す も して 0 今ま ご

ほ するとた か 5 んとう あ んまり お ぬ ばあさんもう きは、 して つ こく 縄をといて下ろしてやりました。 か、 う 殊勝ら ^{じゅしょう} か、 た め きの言うことを た の む ŧ **の** で す

やれやれ。

麦をつ らきねを打ち下ろしますと、 どれ と言い しばられた手足をさすりました。 ながら、 IJ た をして か おばあさんのきねを取ってもにまします。 つ (, てあげま きなり 「きやつ。 おばあさん よう。 そ て死んでという間が がってん

あさん き 代か 化けて、すました顔をして炉の前に座って、ばりにばばあ汁をこしらえて、自分はおば はさ にばばあ汁をこしらえて、 そ お ばあさんをお 理消 た ば

ŧ

か、

の帰れ りを待ちうけ 知し てい な ました。 お

は、

、と 晩^ばん 思もは ぬ き汁 ?食べられるな。 なんにも知らな

、 来 ま 7 した。 すると にこに た 2 しな ぬきの かべ 5 おばあさん 急さ うち はさ

おや お さん、 まお か、 なさい さ きか

というように

たぬき汁をこ しらえて待 て いましたよ。

と言いました。

おやおや、 そうか。 そ 1 は あ IJ た

と言いながら、 た ぬ きの おばあさん すぐ · にお膳 ぜん お の 給 動 動 ま え 仕うじて 座すれ

はおい お (\

りをし と言っ め きの 夢ちゅうしたした おば た にな ぬ あ きの正されば、 いって食べ みをう 一体を現し 思も わず ていま ました。 ば ば ふ、 あける そ お とを笑り見みん

「ばばあくったじじい、

流しの下の骨を見ろ。」ながのみのではながのである。

と ぬきは言い ながら、 大きなしっぽを出

裏口からつ お じ さん いと逃げて は び つ いきました。 かべ

をかかえて て しま いま た。 お (, お そ 泣な て 流がし て の () ま 下 **の** つ おば か、 り腰をぬ あさんの か、 骨ねし

すると、

来ま と言って、 した。 じ いさ h これも裏のないされ 山 に どう いる白うさぎが た 0 て つ

7

ああ、 ておく れ。 うさぎさん ひどい目にあ か。 ょ つ たよ 来き てお れだ。 まあ 聞き

かヾ と す つ とおじ つ て、 か、 IJ いさんは言っ り話をしまし た。 て、 うさぎはた これこれこういうわ んいそう気き

5 は 「まあ、 わた つ や がきっ そ (\ 1 は と ととっ h だこと て 上ぁ げますから、 で た ね け 安かんしん て き (1

し涙をこぼ とたの ŧ しそうに言いまし ながら た。 お じいさんはう れ

や ああ、 しくっ どう てたまらない。 か、 頼たの みますよ。 ほ んとうに わ た は

る

だね。」

「栗の実さ。」

「うさぎさん、

うさぎさん。

何をうまそうに食べてなに

ひ 大いじょう と 大きがまし 目に 合ぁあ したはさっそくた わ してやります。 ぬきを誘 しばらく 待ま出だ て

ら とうさぎは言っ や 帰え て いきました。

にばか 何なん り引っ だ ひか ぬ きはお 込んで わ ものですから、 じ いました。 (\ さん のう ちを逃げ どこへ も出ずに 出だ 穴なか

聞きつ た。 を 出だと き 刈か するとある日、 ぬきの ば けて、 ながら、 りば しきりに いり食たくろう か、 < しばを刈か うさぎは いる穴がな からのそのそ て 持も かまを腰にさしていまるとして すると 7 ま 来きし た は た。 ぬ た たかち栗を-た。そして 出だ きはその て、 かまを 音を出たしば わざ ば

「UD デジタル教科書体」サンプル(A4 判:30pt)

しわた

くれな

いか

う 「うさぎさん、 の山・、きは栗がにの山・、 げ か、 かヾ 上げるよ、 か、 な て、 くと、 (, うさぎさん。 ほ お 0 こ の 先に さき もう一つ たも れ た んぬきはふり返かえかえ 立た またた ばを半分はんぶん ので つ て歩き出 向こうのかち栗を す ぬきはず か、 ち栗をくれ 向む つ こう ま 山まで行 て か、 ずん先き 0 たな な か、 向む

た

出だた。 立た て、 山まで行 山まで行 「うさぎさん どは ああ、 って歩いるある しは何でも早くないかたがないので う うさぎはその しろもふ ってお 上げる 「かちかち。」 ٢, ていきました。 くれ。 うさぎさん。 けれど、 たぬきはふり返かれ り向かずっつかず ひまに、 かずに と火をきりました。 こんどはきっと上 たぬきはまた先に さき の つ せ (\ や ふところ 山まで行きつ でにもう かち栗をく せ てもう て 火打ち石をいい さまし 立た げるから。 こう 向こうかいか。 向む ぬきは と思ま か、 0

ま

した。

た

ぬ

きは

V

かべ

て、

ころげまわ

て、

や

っとのことで燃える

苦る

「うさぎさん、 んに思って、 うさぎさん、 か、 ちかち いう **の** は 何だ

ろう。

「この Ш は か、 5 か、 ち だからさ。

ああ、 そう か。

と言っ て、 たぬ きはまた歩き出 背中中 ま そ 0 う

ち にうさぎの ぼうぼう燃え出-ごぎのつけた火が、 しま たぬきの した。 たぬきはまた **(7)** しば 15 う

に 思っ て、

「うさぎさん、 うさぎさん、 ぼうぼういう **の** は 何だ

ろう。 ああ、 向こう とたぬきが言ううち そう **の** 山 か。 は ぼうぼう 山だからさ。」 もう

燃^もえ ひろがっ て しまい ま た。 火はず た ぬきは んず ん背な

あつ (\ あ () 0

う とさけ しろ からどっ びながら、 と吹ふき 夢
ち
助
た
す
中
っ
け け か、 い泣き声を上げて、な、よけい火が大き け 出だし しますと、 大きくな 山 本 ま か ぜ かべ

「UD デジタル教科書体」サンプル(A4 判:30pt)

ぎは ばをふり落として、 「やあ、 と言いながら帰っれまたかん。 わざと大きな声で 火事だ。 ていきました。 **の** 中に 火事だ。 かけ込みました。 うさ

つ

は背中は す ぬき 込 中大やけどをしゅうおお んでこうやくをこしらえて あ ところ くる日、 へお見舞 うさぎは て **(** \ や おみその うんうんうなりながら、 つ て 、来まし 中に唐が それを持も た。 た ぬ て き た

どい ま ああ、 っくらな穴のあなめ たぬきさん、 目に あっ ほ んとうに たねえ。 中にころがっ た ぬきさん。 ひ どい 目 ほ ていました。 あ んとうにきのう つ たよ。 大ぉ や は

ひ

がや け どはどう h けどに それ ょ いちば したらなおるだろう。 て ね ん 利き あ くこうや ま IJ 気き くをこ 0 毒 どく だ しらえて持も か、 5

もらおう。 「そう か、 () 0 それは あ りがたいな。 さっそくぬ つ

7

た。 がら だ て、 れ こう する て みそをところ いる と背中はまた火がせなか つ 背中を出しますと、うさぎませなかだったぬきが火ぶくれになって かまわずこてこてぬ いたようにあ うさぎはそ IJ 赤かはだ の け 上 な ま に

唐さた

ら、 と言い ま た た。 (, な がら、 うさぎはその (, た た ぬ ての様子を見てにこにこしぬきは穴の中をころげまわぬき をころげまわ な つ

かべ

て

なあ たぬきさん、 ぴ IJ ぴ りする 0 は は め の う

ちだけだよ。 と言っ て 帰れ じきになおるから、 ていきまし 間がが まんお

四

連っ きがたずねて来まし とれた独と出だぬ れ 切言を言って出して、ひど きの か、 ら やつどう 四 五 一日たちま て た。 目 いるところへ、 したろう。 あ わ せ た。 こん て やろう。 ある日う どは ひょ ひとつ海に つ こり さぎは た ぬ

ここらにはまだおさかなはいな

いよ。

ŧ

つ

と

0

おやおや、 たぬきさん、 もうやけどはなおっ た か

ああ、 お 陰が でた いぶよくなったよ。

「そ れ は () じ や あまたどこか 出 か、 け よう

か。

それなら山 いやもう、 は 山 ょ はこ IJ ごり だ。 h

どは 海み 行こう

や

か、 海はおさかな か とれるよ。」

なるほど、 海み はおもしろそうだ ね。

そこでうさぎとたぬきは連れだ つ て 海ヵ 出 か、 け

をこ うらやま た。 た。 た。 うさぎが木の舟をこしらえますと、 舟ができ上がるふね。 たぬきは でんき 出・ しがっ へ出ますと、 土った て の 舟 ま に 乗の ねを りました。 うさぎは木の舟に乗 して土の 舟をこ た 5 ぬきは 舟ね ま ま

ねえ。

け しきだねえ。

かべ め いま でんに言 た か、 いながら、 うさぎは め ずら しそうに海をな 沖き

「UD デジタル教科書体」サンプル(A4 判:30pt)

方までこいで行こう。 さあ、 どっちが早はや か競争し

と言いし ま た。 た

ぬきは

と言いま よし、 た。 そ れ はおもしろかろう。

そこでー、 二、 け声をし こぎ出だ

「どうだ、 うさぎはか 木の の舟は軽くって速いたかんかんかん舟ばたをたれかんがんりが ろう。 た ()

、舟ばたをこんこんたたと言いました。するとたい ぬ きも負け な い気にな

いて、

なあに、 と言い いま 土の舟は重くっっち。ふね。おも た。 て丈夫だ。」

そのうちにだんだん水が しみて土の舟は崩ったいる

ました。

「やあ、 たい ん。 ·丿して、大さわぎをはい舟がこわれてきた」

とたぬきがび つ めま

た。

ああ、 沈ず む 沈ず む 助なす け

ながめながら、 うさぎはたぬきのあわてる様子をおもしろそうに

「ざまを見ろ。

ば

あ

をだ

ま

お

底本:「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社 1983 (昭和 58) 年 5 月 10 日第 1 刷発行 1992 (平成 4) 年 4 月 20 日第 14 刷発行

入力:鈴木厚司

校正:大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

そ ŧ か う 助な言い 5 け ば ま て ば す め き あ 1 は 舟な言いた を とう 食〈 は め 崩ずて き は せ ŧ た う む さぎを あ ま お だ ,<u>)</u>, な あ かべ ま 4 つ ,<u>)</u>, ま は た。